

11 インターネットによる情報の提供

都内で発生した病害虫の情報や防除対策等の提供のためインターネット上に東京都病害虫防除所ホームページを開設している。ホームページでは、病害虫防除所の組織・業務案内、トラップ等の調査結果、病害虫発生予察情報、病害虫防除指針、防除技術等に関する情報、気象情報、病害虫に関する都関係機関の文献・資料の目録などの情報を提供している。

ホームページアドレス : <https://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.lg.jp/nourin/shoku/anken/boujyo/>

eメールアドレス : S0200303@member.metro.tokyo.jp

今月の防除のポイント

毎月、農家等へ発生予察情報や病害虫の防除対策等を提供していたテレホンサービスが平成23年度で終了したため、平成24年度からはホームページ上で、「今月の防除のポイント」として情報提供を行っている。

【令和3年4月】

令和3年3月26日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<施設トマト>

○灰色かび病対策

灰色かび病菌は15～23℃と比較的低温、多湿条件下で発生しやすいため、暖房機の稼働時間が減少するこの時期は、夜間の施設内湿度が上昇し、本病が多発する傾向があります。ハウス内の過湿に注意し、換気を十分に行ってください。曇雨天等で換気が十分行えない場合は、循環扇等を活用し、植物体表面を早く乾かすようにしてください。発病した果実や葉は、早急に処分し、その後、薬剤散布を行ってください。また、茎葉が繁茂しすぎると通風が悪くなり病害が発生しやすくなるほか、薬剤もかかりにくくなります。適宜整枝、葉かき等を行い、適切な肥培管理に努めましょう。

なお、薬剤散布の際は耐性菌出現防止のため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を実施しましょう。

<施設イチゴ>

○アザミウマ類及びハダニ類

アザミウマ類の被害を受けた果実は茶褐色でざらざらになり、商品価値を損ないます(図1)。巡回調査によるとアザミウマ類の発生は一部のほ場で多くみられ、今後、気温の上昇と共に激発し、被害が

甚大となる可能性があります。幼虫に対してはI G R系殺虫剤が有効で、適期に散布することで被害を抑制できます。I G R系統の薬剤は天敵に対しても影響が少ないことが知られています。

ハダニ類の発生はやや少なく推移していますが、季節的に増加する危険性があります(図2)。この時期はカブリダニ類等の天敵類の活動も活発になります。天敵に影響の少ない剤を選択し、天敵と殺虫剤の相乗効果で栽培終盤戦を乗り切りましょう。

なお、受粉用ミツバチを導入している場合、散布薬剤が限定されます。散布前にミツバチに影響する日数を確認しましょう。



図1 アザミウマ類による被害果実



図2 ハダニ類による被害株

○灰色かび病及びうどんこ病

巡回調査によると、灰色かび病及びうどんこ病の発生はやや少ないですが、例年、外気温の上昇に伴い増加する傾向があります。多発すると防除が難しくなるため、発生を確認した場合は早急に処分し、その後系統の異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

<ナシ>

○黒星病

黒星病は芽基部の越冬病斑等から胞子が飛散する出蕾期からりん片脱落期、開花期直前が重点防除時期となっています。防除指針を参考に防除を徹底し、落花期以降の発生の拡大を防ぎましょう。また、薬剤の防除効果を上げるため、越冬病斑の除去は徹底的に行いましょう。

○赤星病

中間宿主であるビャクシン上の冬胞子は3月下旬から4月下旬にかけての降風雨によってナシへ飛散、感染します。降雨前後の薬剤散布が効果的ですので、防除指針を参考に適期を逃さず防除しましょう。

【令和3年5月】

令和3年4月28日

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<キュウリ・ナス・ピーマン等>

○アブラムシ類

キュウリやナス及びピーマン等の定植が始まると、アブラムシ類の対策が重要になります。本種は直接の吸汁害を引き起こすだけでなく、ウイルス病を媒介します。防除指針を参考に定植時の粒剤処理及び適期の薬剤散布を行きましょう。

殺虫剤による防除以外では物理的防除が有効です。施設では近紫外線除去フィルムの展張と防虫ネットの組み合わせで高い防除効果が期待できます。なお、本フィルムはアザミウマ類についても同様の効果が確認されています。露地では、光反射資材（ムシコンマルチ等）を圃場に敷設し、飛来侵入を防止しましょう。

<施設トマト>

○コナジラミ類

トマト黄化葉巻病を防ぐ観点から、タバココナジラミの防除が重要です。栽培終期の促成長期では**増やさない・出さない**対策が重要です。タバココナジラミバイオタイプQは殺虫剤抵抗性が特に発達しており、効果の高い殺虫剤は限られています。本種を増やさないために、防除指針を参考に殺虫剤を選択しましょう。また、野外に出さない対策として、施設外へ出す植物残渣は直ちに埋設処理しましょう。

半促成栽培では**入れない**対策が最も重要です。発生状況を監視するために黄色粘着トラップ（ホリバー黄色等）を100㎡あたり1枚の割合で施設に設置し、コナジラミ類が誘殺されたら、防除指針を参考に殺虫剤を散布しましょう。

<初夏どりキャベツ>

4月の巡回調査では、モンシロチョウやコナガなどのチョウ目幼虫による被害が見られました。さらに、防除所のフェロモントラップに捕獲されるヨトウガ及び、カブラヤガの成虫は例年より多い傾向です。IGR系などの天敵に影響の少ない剤を選択し、圃場を良く観察して適期に防除しましょう。

ネギアザミウマ成虫の発生はやや多い傾向でした。今後さらに増加する時期になります。防除指針を参考に防除を行きましょう。

<ネギ・タマネギ>

べと病は適温（15℃前後）下の降雨後に急速に拡大することがあります。圃場の観察を丁寧に行い、発病が確認されたら防除指針を参考に速やかに薬剤散布を行きましょう。また、さび病は肥料切れすると発生しやすくなりますので、肥培管理に注意しましょう。

<施設野菜・花き>

4月の巡回調査では、灰色かび病やうどんこ病の発生が認められています。これらは例年、外気温の上昇に伴い増加する傾向にあります。両病害とも多発すると防除が難しくなるため、発病した果実、葉や花は早急に処分し、その後系統の異なる薬剤をローテーション散布しましょう。また、茎葉が繁茂しすぎると通風が悪くなり、病害が発生しやすくなるほか、薬剤もかかりにくくなります。適宜、整枝や葉かき等を行い、適切な肥培管理に努めましょう。

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<トマト>

○葉かび病及びすすかび病（図1、2）

半促成栽培において葉かび病の発生が増える時期です。最近では抵抗性品種の導入により、大発生する圃場は少なくなっていますが、葉かび病抵抗性品種を発病させる菌種が確認されていることや、症状が類似しているすすかび病が発生している場合もあり、注意が必要です。両病害とも多発すると防除が難しいため、発生を認めた圃場では速やかに葉裏にもかかるよう丁寧に薬剤を散布しましょう。



図1 葉かび病の病徴



図2 すすかび病の病徴

○アザミウマ類

気温上昇に伴い、ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマが増加します。これらのアザミウマ類は葉を加害するだけでなく、実の白ぶくれ症を引き起こし、ウイルス病を媒介します。施設トマトの防除対策としては近紫外線除去フィルムの展張と防虫ネットの併用が有効です。薬剤散布を行う際は、一部の農薬に抵抗性が報告されているため、防除指針を参考に有効な剤を選択しましょう。

<施設・露地キュウリ>

○べと病及びうどんこ病

巡回調査ではべと病並びにうどんこ病の発生が確認されています。

べと病は気温20～24℃、多湿条件で発病しやすく、今後、曇雨天が続くと多発する恐れがあります。一方、うどんこ病はやや乾燥条件を好み、湿度45～95%で発病するという試験例があります。

いずれの病害も進行すると防除が難しくなるため、初発を見逃さないように圃場をよく観察し、予防的な防除を心がけましょう。

<初夏どりキャベツ>

○ネギアザミウマ、アブラムシ類及びヨトウガ等のチョウ目幼虫

巡回調査ではネギアザミウマの発生が目立っており、今後被害が多くなると予想されます。アブラムシ類の発生は少ない傾向ですが、有翅虫の飛来が多く確認されていることから、今後増加すると予想されます。また、ヨトウガは中・老齢期に移行していくため、被害が大きくなります。

圃場をよく観察し、発生を確認した場合は、防除指針を参考に適切な殺虫剤を選択して防除を行いましょう。

【令和3年7月】

令和3年6月29日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<キャベツやブロッコリーなどのアブラナ科作物>

○ハイマダラノメイガ

梅雨明けからハイマダラノメイガの発生が問題となります(図1)。防除の決め手は、育苗期と定植初期の徹底管理です。育苗期間は防虫ネットで成虫の侵入を防ぎ、定植時は粒剤や灌注処理を行いましょう。なお、これらの処理が可能な作物は限られています。防除指針を参考に防除方法を選択しましょう。

<施設・露地トマト>

○かいよう病

施設並びに露地栽培でかいよう病が発生しています。本病は土壌伝染し、病原菌は長期間土壌中に生き残ります。発生が認められたら、まん延を防ぐため発病株は早めに処分し、カスミンボルドーを散布しましょう(ただし、ミニトマトには登録はありません)。二次的に発病株の汁液によっても伝染しますので、感染の疑いのある株の摘芽、誘引は最後に行いましょう。

○アザミウマ類

6月の巡回調査では白ぶくれ症(図2)の発生が多く確認されました。今後もアザミウマ類の発生時期が続きます。アザミウマ類はウイルス病を媒介するため、防除指針を参考に適切に防除しましょう。

また、近紫外線除去フィルムと防虫ネットを組み合わせた施設では白ぶくれ症が非常に少ない傾向にあります。今後フィルムを張り替える際は同資材の導入を検討しましょう。但し、ミツバチの行動やナス、紫ブロッコリー等の着色に影響することから、栽培品目によっては導入できないこともあります。

○タバココナジラミ

7月から9月はタバココナジラミの発生増加期です。タバココナジラミはトマト黄化葉巻病ウイルスを媒介します。トマト黄化葉巻病ウイルスを保毒した虫が施設から野外に逃亡すると、トマト黄化葉巻病の発生が助長されます。防除指針を参考に適切に防除しましょう。

<キュウリ>

○べと病及びうどんこ病

巡回調査では、施設並びに露地栽培において、中下位葉にべと病の発生がやや多く確認されました。べと病は降雨が連続すると急激にまん延します。また、うどんこ病は栽培後期に多発する傾向があります。

ます。いずれも今後拡大していく恐れがあります。初期病斑を見逃さず的確に防除しましょう。



図1 ハイマダラノメイガ幼虫



図2 トマトの白ぶくれ症

【令和3年8月】

令和3年7月29日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<農作物全般>

○在来天敵類の活用

ヒメハナカメムシ類は、アザミウマ類やハダニ類などの防除に大きな役割を果たしていることが知られています。予察灯の誘殺数では8月が最も多くなる傾向があり、一年のうちでこの時期が最も力を発揮しやすいと考えられます。しかし、すべての害虫を天敵のみで防除することは難しいため、BT剤やIGR剤など天敵に影響の少ない農薬を併用し、害虫の密度を下げるのが重要です。適切な殺虫剤を選択し、圃場に生息するこれら天敵の力を上手に利用しましょう。

○タバコガ類 (図1、2)

7月の巡回調査でトマト、ナス、花き類への被害が確認されました。特にオオタバコガは寄主範囲が広く、キャベツ等の葉菜類も加害します。今後、増加期にあたるため、被害が多くなると予想されます。ほ場を注意深く見回り、食害の痕跡がある場合は、若齢幼虫のうちに防除指針を参考にしっかり防除しましょう。また、被害果は速やかに除去しましょう。



図1 トマトの果実を加害するタバコガ類



図2 ナスの花を加害するタバコガ類

<トマト>

○トマト黄化葉巻病等のウイルス病

8月から9月にかけて促成長期どり栽培や抑制栽培では、ウイルス病の対策が重要です。トマト黄化葉巻病の原因であるトマト黄化葉巻ウイルスは感染力が強く、低密度でも大きな被害を及ぼします。

特にウイルス病は育苗期に感染すると病徴が激しく、被害が大きくなるため、この時期にウイルスを媒介するコナジラミ類やアザミウマ類の防除を徹底する必要があります。育苗時から施設開口部に0.4mm目合以下の防虫ネットを張ってコナジラミ類やアザミウマ類の侵入を防ぐとともに、黄色粘着トラップを設置し、これら害虫の発生を監視しましょう。発生を確認したら、速やかに防除指針を参考に適切な防除を行いましょ。う。

<ネギ類>

○ネギアザミウマ

巡回調査では寄生率が高く、今後も増加期にあたるため被害が多くなると予想されます。ネギアザミウマは薬剤抵抗性が懸念されていますので、防除指針を参考に適切な農薬を選択し、防除を行いましょ。う。

<アブラナ科野菜>

○ハイマダラノメイガ

ダイコン、キャベツ、ハクサイ、カブなどの害虫で、幼苗期や生育初期に幼虫が生長点付近の葉や茎を加害します。夏期の気温が高く、少雨の時は発生が多くなります。キャベツやブロッコリーでは育苗時、防虫ネット等を活用し、育苗期後半から定植期にかけては防除指針を参考に防除を行いましょ。う。

【令和3年9月】

令和3年8月27日

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<イチゴ>

○害虫

9月定植イチゴの栽培期間は翌年の5月頃までと長いため、害虫の発生が多いこの時期の管理が最も重要です。栽培施設内外の圃場衛生管理を徹底し、健全な苗を定植しましょ。う。

定植後に発生する害虫ではハダニ類の防除が重要になります。11月頃まで徹底的に防除することで、来春の発生が大幅に軽減されます。また、ホコリダニ類はいったん発生すると防除が困難なため、効果の高い殺ダニ剤を防除体系に加えることも重要です。

ダニ類以外の防除には施設サイドへの防虫ネットの展張が有効です。さらに、黄色粘着トラップでアザミウマ類、アブラムシ類及びコナジラミ類等の発生を監視し適期防除を心がけることで、農薬の散布回数を減らすことができます。

また、在来天敵や生物農薬を有効に利用することで、ハダニ類やアザミウマ類等の密度を低く保つことができます。天敵を活用する際はこれらに影響が少ない剤を選択しましょ。う。

○炭疽病

炭疽病は高温多湿により発生を助長されます。定植をむかえるこの時期は、残暑に伴う高温とともに、台風や秋雨前線の影響で降雨が連続しやすくなるため、本病害の発生が多くなります。本病は定植後に発生した場合、薬剤での防除が困難ですので、苗での持ち込みを防ぐことが肝要です。定植前に苗をよく観察し、萎凋、葉上の黒色小斑点等、本病害の感染が疑われる苗はすみやかに取り除き、健全苗を定植するよう心がけましょう。

<キャベツ、ブロッコリー等のアブラナ科野菜>

○害虫

この時期に最も注意しなければならない害虫はハイマダラノメイガ(図1)です。生長点近くを食害されると、生育の停止や枯死等の致命的な被害が発生します(図2)。また、オオタバコガやネギアザミウマの被害にも注意が必要です。防除指針を参考に適切な防除を行いましょう。



図1 ハイマダラノメイガ幼虫



図2 ハイマダラノメイガ幼虫による食害

○細菌性病害

この時期に定植する作型では黒腐病、軟腐病等の細菌性病害が発生しやすくなります。これらの細菌は、強風雨による傷や昆虫の食害痕等から侵入するため、食葉性害虫の防除を徹底するとともに、台風や大雨の後は天候が回復次第、防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。

<トマト>

○黄化葉巻病対策

この時期は黄化葉巻病対策が最も重要です。収穫終了後、放置されたままの露地及び施設トマトで黄化葉巻病に感染した株が多く認められています。このような株は抑制及び促成長期どり栽培での感染源になりますので、速やかに抜き取り、完全に枯死させてから廃棄しましょう。施設の場合は、連続2日以上晴天時に蒸し込みを行うことが、媒介虫であるタバココナジラミの施設外分散防止に効果的です。

抑制及び促成長期どり栽培では、タバココナジラミを入れない対策が重要です。施設には近紫外線除去フィルム及び0.4mm目合い以下の防虫ネットの展張が有効です。さらに、黄色粘着トラップを設置して侵入個体を見張り、コナジラミが確認されたときはタバココナジラミバイオタイプQ成虫に効果が高い剤を散布しましょう。

【令和3年10月】

令和3年9月30日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<アブラナ科野菜>

○ヨトウムシ類及びオオタバコガ幼虫

9月の巡回調査では、ヨトウムシ類の卵塊や若齢幼虫が確認されました。フェロモントラップ調査では、ハスモンヨトウがやや多く誘殺されています。例年10月のヨトウムシ類やオオタバコガは老齢幼虫が中心となります。老齢幼虫の摂食量は全幼虫期間の90%以上を占めると言われています。また、老齢幼虫は農薬が効きにくくなります。

ほ場を注意深く見回り、食害の痕跡がある場合は、若齢幼虫のうちに防除指針を参考にしっかり防除しましょう。

○アブラムシ類

アブラムシ類は主にダイコンアブラムシとモモアカアブラムシが発生します。特に、ダイコンアブラムシが寄生すると葉の引きつれが生じ、商品価値が低下します。防除指針を参考に防除を行いましょう。

○細菌性病害（黒腐病、黒斑細菌病、軟腐病）

軟腐病は高温で、黒腐病と黒斑細菌病は比較的気温が涼しい時期に発生します。風雨による傷や害虫の食害痕から細菌が侵入し、天候不順が続くと発生が増加します。そのため特に台風の後には注意が必要です。

いずれも病斑の進展が早く、発病後の防除は困難な場合が多いため、防除指針を参考に予防散布に努めるとともに、葉裏や地際部等もよく観察し初発を見逃さないようにしましょう。

<施設トマト>

○黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病の原因となるタバココナジラミの侵入は、今後は次第に減少しますが、引き続き注意が必要です。10月までに感染を防ぐことができればその後の害虫対策は非常に楽になります。9月に引き続き感染株の抜き取り、成虫に効果の高い殺虫剤の散布を継続しましょう。

○葉かび病及びすすかび病

9月の巡回調査では、葉かび病とすすかび病の発生が確認されました。すすかび病と葉かび病は症状が類似しており、肉眼での判別は困難です。

両病害とも多発すると防除が難しいため、葉かび病とすすかび病の両方を考慮し、予防を中心とした防除対策を検討しましょう。

<抑制キュウリ>

○主要な害虫と対策

9月の巡回調査において、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類の寄生が確認されています。

アブラムシ類及びコナジラミ類はウイルス病を媒介します。防除指針を参考に防除を行いましょう。ハダニ類は葉表に白いかすり状の模様が見つかったら要注意です。ハダニ類の発生を確認したら殺ダニ剤を散布しましょう。

○うどんこ病及び褐斑病

巡回調査ではうどんこ病の発生が確認されています。例年、栽培が中～後半に入ってくると、茎葉の過繁茂や成り疲れによる草勢の低下等の要因が重なり両病害とも多発する傾向にあります。多発すると防除が困難となり、収量が低下する恐れもありますので、発生を認めたら防除指針を参考に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行いましょう。

【令和3年11月】

令和3年10月27日

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<露地野菜>

○細菌性病害（軟腐病、黒腐病、黒斑細菌病等）

10月の巡回調査では、ハクサイ及びダイコンのアブラナ科野菜において軟腐病の発生を確認しました。

これらの細菌病は害虫による食害痕や傷口等から病原菌が侵入し、風雨等により感染が拡大します。特に軟腐病は多くの作物に感染します。いずれも病気の進展が早く、発病後の防除は困難な場合が多いため、注意が必要です。

防除指針を参考に予防散布に努めるとともに、葉裏や地際部等もよく観察し初発を見逃さないようにしましょう。また、発生を確認した圃場では、雨の日に管理作業・収穫作業を行わないようにしましょう。

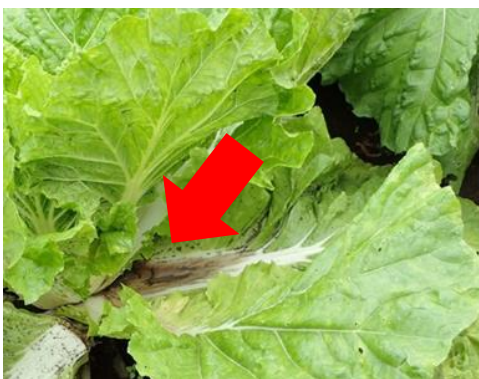


図1 株元の軟腐病の病徴（ハクサイ）



図2 軟腐病の罹病株（キャベツ）

<施設イチゴ>

○ハダニ類及びホコリダニ類

この時期最も重要な害虫はハダニ類です。10月の巡回調査ではハダニの発生は平年並です。本圃に

おけるハダニ類の発生源は苗からの持ち込みと周辺雑草からの移入ですが、この時期の防除が不完全だと後から大変苦勞します。マルチ設置後は内部にハダニ類が逃げ込むため防除効果が低下しますので、設置前に徹底防除しましょう。また、ハダニ類にはカブリダニ類やハダニバエ等の有力な天敵が存在するため、できる限り天敵に影響の少ない剤を選択することも重要です。12月になるとハダニの侵入はほとんどなくなります。11月までの防除を徹底することで、収穫最盛期の防除作業が軽減されます。

ハダニ類以外の害虫ではホコリダニ類が要注意です。葉が深緑色に変色し、ねじれなどの変形が確認された場合は、本種の発生を疑いましょう。ホコリダニ類はハダニ類よりさらに小さいため、肉眼での発見は困難です。芯葉部を好むため殺虫剤が届かないことがあります。発見した場合は丁寧な散布を心がけましょう。

<施設トマト>

○タバココナジラミ

巡回調査では、今年のタバココナジラミの発生はやや少なかったのですが、トマト黄化葉巻病の発生は一部の地域で定植初期から発生していました。今後、タバココナジラミの外部からの侵入はほとんどなくなるため、施設に生息する個体の防除が中心となります。今までは成虫侵入対策が防除として重要でしたが、今後は幼虫に対し効果の高い殺虫剤も併用し、施設内の防除の徹底を目指しましょう。

<施設野菜・花き>

○うどんこ病

10月の巡回調査では、一部の施設キュウリでやや多く発生が確認されています。今後、施設栽培で発生が多くなり、昼夜の温度差が大きいと発生が拡大するため、注意が必要です。発生を認めたら、速やかに発病葉、発病株を除去し、施設外に持ち出します。病状が進むと防除が難しくなります。防除指針を参考に予防も含め、葉の表裏に薬剤散布を行いましょう。

○灰色かび病

施設栽培において灰色かび病が発生する時期となってきました。環境条件は20℃前後で曇天・多湿が続くときに激発します。そのため施設内が過湿にならないように、適度な換気を行いましょう。また、茎葉が過繁茂にならないように、適正な肥培管理を行うようにしましょう。発生を認めたら発病部位を除去します。合わせて、防除指針を参考に予防も含め、薬剤散布を行います。その際、同一系統の殺菌剤を連用すると薬剤耐性菌が発生し防除効果が低下する恐れがあるため、ローテーション散布に努めましょう。

【令和3年12月】

令和3年11月29日

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<イチゴ>

○ハダニ類

12月以降のハダニ類は施設外からの侵入がほとんどないため、今後は施設内の個体数を減らすことが重要となります。効率的な防除の工夫として、図1のように発生場所に旗等の目印を立てる方法があります。利点は二つあります。一つ目は、発生場所が可視化できる点です。ハダニの発生は均一に起こることは少ないため、重点防除が必要な場所の把握が容易になります。二つ目は、防除効果が確認できる点です。散布後の調査でハダニの生息範囲が広がったり、旗付近での生き残りが多ければ、前回の対策が不十分であったことが確認できます。その結果、今後の薬剤や散布時期の変更などについての判断が容易になります。このような工夫も取り入れハダニ対策を行いましょう。



図1 ハダニ発生場所の目印

<促成長期どりトマト>

○タバココナジラミ及びトマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病の原因となるタバココナジラミの防除が重要となります。外部からの侵入はほとんどなくなるため、施設内に生息する個体の防除が重要となります。11月に引き続き幼虫に対し効果の高い殺虫剤も併用し、施設内の徹底防除を目指しましょう。本種は比較的高温を好むため、低温期になると発育が遅くなり、幼虫が長い間寄生することになります。冬季は葉かきを適度に行い、下葉を除去することで防除効果を高めることができます。

○灰色かび病

施設栽培において灰色かび病が発生し始める時期です。20℃前後の多湿条件下で被害が拡大しやすい病気です。施設内が過湿条件になると病原菌が蔓延する恐れがあるため、適度な換気を行うようにしましょう。また、茎葉が繁茂すると発生しやすくなるため、適正な肥培管理及び適度な葉かきを行うようにしましょう。

発生を認めたら発病部位を除去します。合わせて防除指針を参考に、予防も含め、薬剤散布を行います。その際、同一の殺菌剤を連用すると耐性菌が出現する恐れがあるため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を心がけましょう。

<アブラナ科野菜>

○白さび病（図2、3）

本病はハクサイ、ダイコン、コマツナ等アブラナ科野菜類に発生する病害で、葉裏に不規則にふくれ

た白色の粉状の塊を形成し、葉の黄化や奇形を引き起こします。また、ダイコンの白さび病菌は根部に黒色のリング状斑紋（わかか症）を引き起こします。

病原菌は比較的低温を好むため、晩秋から早春にかけて降雨が多いと発生しやすくなります。

ほ場を注意深く観察し、発生を確認した場合、被害葉を除去し、防除指針を参考に薬剤散布を行います。



図2 コマツナの白さび病



図3 ダイコンのわかか症

○べと病

11月の巡回調査では、一部の露地圃場で発生が認められました。本病は例年11月～3月の低温時期に発生が確認されています。カブやダイコンでは地下部に黒変症状を引き起こすことがあり、注意が必要です。

作物が長時間濡れた状態になっていると急速に拡大し防除が難しくなるため、換気等を行い、作物体周囲の湿度をできるだけ低く保つよう心がけましょう。また、発生を確認した場合、発病葉は速やかに除去し、防除指針を参考に薬剤を散布しましょう。

【令和4年1月】

令和3年12月28日

主な作物の病虫害防除について、お知らせします。

<無加温施設及び露地野菜>

○秋冬に発生する害虫（低温期の害虫）

気温が下がると害虫の発生が減少する傾向にありますが、この時期に問題となる害虫も存在します。ほ場の見回りをしっかり行い、害虫の発生を見落とさないようにしましょう。

1. ハクサイダニ

真冬に発生し、コマツナ、ホウレンソウ、シュンギク等多くの作物を加害します。被害葉は銀白色となり（図1）、さらに被害が進むと枯死します。近年被害が増加傾向にあります。

胴長は0.8ミリで体色は黒色、脚は赤色と派手なため非常に目立ちます（図2）。植物体上や地表を素早く移動し、外敵が接近すると葉裏に隠れます。休眠卵が10月頃に孵化し始め、5月頃まで植物を加害します。真冬でも本種は発生するため、しっかりとほ場の見回りを行います。

被害株は餌となるだけでなく、卵が多く産み付けられているため、発見次第早期に抜き取ってください。また、被害の多かった圃場には土壌中に多くの卵が残り、翌年の発生源となります。盛夏期に1ヶ月程度、土壌の太陽熱処理を行うことで、本種の発生を抑制することができます。薬剤防除をする場合は、防除指針を参考に行ってください。



図1 ホウレンソウの被害



図2 株元に密集するハクサイダニ

2. クローバーハダニ（クローバービラハダニ）

コマツナやホウレンソウの葉の表面に線状の白い斑点があり、すばしっこく動く赤黒いダニが確認されたら、本種による被害と考えられます。冬季は無農薬栽培の施設で多く見つかります。多くの場合、防除の必要はありませんが、薬剤防除をする場合はハダニ類に登録のある農薬が使用できます。防除指針を参考に対策を考えましょう。

3. ヤサイゾウムシ

10月頃から幼虫が発生し、コマツナ、ダイコン、カブ等を食害します。新芽を食害されると芯止まりを引き起こします。八丈島でセルリーを暴食した事例があり、注意が必要です。

<アブラナ科野菜>

○べと病（図3、4）

例年11～3月にかけて発生します。巡回調査では、トンネル栽培のホウレンソウやコマツナで発生をやや多く確認しました。主な病徴は葉への淡褐色の不定形～多角形病斑形成と黄化ですが、カブに発生した場合、根内部に小黑点を発生させることもあるため、注意が必要です。作物が長時間ぬれた状態になっていると急速に拡大し、防除が難しくなるため、換気や除湿等を行い、作物体周囲の湿度をできるだけ低く保つよう心がけましょう。



図3 ホウレンソウべと病



図4 カブ根内部の症状

<施設野菜および花き類>

○灰色かび病（図5、6）

巡回調査では、施設栽培の花き類等で灰色かび病の発生を確認しました。病原菌は多くの作物に寄生しますが、特にこれからの時期は施設栽培で発生が多くなります。施設内では多湿環境になることが多いため、被害が拡大しやすく、注意が必要です。

作物が長時間濡れている状態になっている場合は、換気、循環扇、暖房などによる除湿に努めてください。また、葉が繁茂していると、湿度が高くなるだけでなく、薬剤もかかりにくいいため、適度な葉かきを行いましょう。

多発すると防除が難しくなるため、発生を確認した場合、被害部位を除去し、防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。その際、耐性菌の出現している薬剤もありますので、系統の異なる薬剤のローテーション散布に心がけましょう。

なお、薬剤散布は暖かい晴天日を選び、夕方までに薬液が乾くような時間帯に行いましょう。



図5 トマト灰色かび病
(茎における発病)



図6 イチゴ灰色かび病

【令和4年2月】

令和4年1月27日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

<育苗期の病害虫対策>

施設内の雑草にはハダニ類、アザミウマ類及びコナジラミ類など多くの

微小害虫が越冬しているため、育苗は雑草の無いきれいな施設で行いましょう。そろそろアブラムシ類の飛来が始まりますが、これは防虫ネットで防除可能です。害虫の飛来を見張るには黄色粘着トラップが有効で、アブラムシ類、アザミウマ類及びコナジラミ類等の発生状況がわかります。

また、育苗施設内や育苗土等の湿度が高くなると苗立枯病等の病害が発生しやすくなります。かん水は天気の良い午前中に行い、夕方までには茎葉の水滴が乾くようにするとともに、施設内の湿度を下げるため、必要に応じて適宜換気をするようにしましょう。

<野菜類>

○ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ等）

1月の巡回調査では、施設栽培のイチゴでハダニ類の発生が確認されており、今後は増加期に入ります。多発してからの防除は困難なため、発生状況を把握し適切な対策を取りましょう。ハダニ類はスポット的に発生し、そこから広がる傾向にあります。散布剤の効果を確認するために、発生地点に目印を立て経過を観察することも有効な対策です。殺ダニ剤の多くは葉裏までしっかり噴霧しないと効果が発揮されません。葉の整理を行ったときが防除適期となります。天敵に影響が少ない剤を選択し、防除に努めましょう。

○灰色かび病

12月頃から本病の発生が見受けられるようになりました。1月の巡回調査では、施設栽培の花き類で発生が確認されています。本病は施設内の過湿により発生が助長されますので、換気扇（循環扇）や温風暖房機を活用するなど、湿度を下げる換気管理作業に努めましょう。発生を認めたら防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。なお、耐性菌が発生しやすい病気なので、系統の異なる薬剤をローテーション散布するよう心がけましょう。

○うどんこ病

ここ数年、作型に関係なく栽培の中～後期に本病の多発しているほ場が多くなっています。1月の巡回調査では促成栽培のトマトで発生を確認しました。多発すると防除が困難となり、収量が低下する恐れもあるため、発生を認めたら防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。また、茎葉の過繁茂や肥料切れ等も発生を助長します。適切な栽培管理を行いましょう。

○菌核病（図1、2）

本病は、20℃前後の多湿条件下で被害が拡大しやすく、露地栽培で多く発生しますが、施設栽培でも1～3月にかけて発生が多くなる傾向にあります。作物が長時間濡れた状態になっている場合は急速に拡大し、防除が難しくなるため、換気や除湿等を行い、施設内の湿度をできるだけ低く保つようして下さい。発生を確認した場合は菌核を形成する前に発病株を施設から外に持ち出す等、適切に処分し、防除指針を参考に薬剤散布を行いましょう。

また、露地では栽培終了後に放置されたキャベツやハクサイの残渣にも、ネズミの糞状の菌核が認められています。このような残渣は次年度の発生の原因となりますので、速やかにほ場から持ち出し、焼却するか土中深くに埋めましょう。



図1 菌核病により腐敗したキャベツ（露地）



図2 菌核病により腐敗したハクサイ（露地）

【令和4年3月】

令和4年2月28日

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

＜初夏どりキャベツの主要害虫の発生消長と防除適期＞

初夏どりキャベツで発生する主な害虫はコナガ、モンシロチョウ、ヨトウガ、アブラムシ類及びネギアザミウマです。これらの害虫の発生時期と防除適期をご紹介します（下記の発生時期と防除適期は例年を参考にしたもので、これより早まるまたは遅れる可能性があります。ご自分の圃場をよく観察してください）。また、春は暖かくなり、その他の害虫も増える時期なので、圃場観察を怠らないようにしましょう。

・コナガ

薬剤に対する抵抗性が多く報告されており、防除が難しい重要害虫です。5月下旬より収穫時まで急激に増加します。防除適期は5月中旬～6月上旬です。

・モンシロチョウ

幼虫のピークは2回あり、防除適期は5月の連休明けと6月上旬です。微生物農薬のB T剤も含め殺虫剤はよく効きます。慣行栽培での被害は少なく、有機栽培で問題になることがあります。

・ヨトウガ

5月連休明け頃より幼虫が発生します。本種の卵は卵塊で産み付けられるため、幼虫が集団で生息する3齢幼虫初めまでに防除することが重要です。従って、防除適期は5月中・下旬となります。産卵時期の遅い卵塊では寄生蜂の寄生率が高まります。

・アブラムシ類

主にダイコンアブラムシとモモアカアブラムシが発生します。5月中旬から収穫期まで増加します。防除適期は5月中・下旬です。

・ネギアザミウマ

キャベツでは近年被害が問題となっている害虫です。5月下旬頃より急激に増加し、特に結球部の被害が問題となります。防除適期は5月中・下旬と6月上旬です。

＜施設トマト及びイチゴ＞

施設栽培のイチゴのハダニ類は多発してからの防除は困難なため、発生状況を把握し適切な対策を取りましょう。ハダニ剤の多くは葉裏までしっかり噴霧することで効果が発揮されます。また、農薬に対する抵抗性が多く報告されているため、系統の異なる薬剤を選択しましょう。

促成栽培のトマト及びイチゴで、灰色かび病やうどんこ病が発生し始める時期です。両病害とも多発してからの防除は困難ですので、発生を確認した場合は速やかに発病部位を除去し、施設外へ持ち出し適切に処分する等耕種的防除に努めましょう。また、薬剤を散布する場合は、耐性菌の発達を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

＜育苗期の病害虫管理について＞

春作に向けて、既に育苗を始めている方も多と思います。過去に大きな被害をもたらした病害の中には、育苗時の感染が原因となっている場合も多いため、病害の発生が無い苗を育苗、定植すること

が重要となります。

育苗土は消毒済みのものを使用するほか、資材等に病原菌が付着している場合もあるため、育苗箱等の消毒も行いましょう。かん水が過度にならないようにする、頭上かん水を避ける等、育苗施設内が過湿状態にならないようにすることも重要です。また、ウイルス病を媒介するコナジラミ類、アザミウマ類やアブラムシ類の発生に注意し、発生を確認した場合は、防除指針を参考に薬剤防除を行いましょう。